



地域素材を活用した社会科の授業実践： 苫前町三毛別熊害事件をもとに

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 因, 雅仁, 藤川, 聡, 水上, 丈実 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00006366

地域素材を活用した社会科の授業実践

— 苫前町三毛別熊害事件をもとに —

因 雅仁*・藤川 聡**・水上 丈実**

*北海道苫前町立苫前小学校

**北海道教育大学大学院教育学研究科高度教職実践（教職大学院）

A Practice of the Education Method Using Regional Material in Social Studies

— On the basis of the Bears incident in Tomamae Sankebetsu Town —

IN Masahito*, FUJIKAWA Satoshi** and MIZUKAMI Takemi**

*Tomamae Primary School, Tomamae-cho, Hokkaido

**Department of Advanced Teacher Professional Development Program, Graduate School of Education, Hokkaido University of Education

要 旨

本研究は、小学校4年生の社会科の地域学習において、「三毛別熊害事件」という地域の実例を素材とし、独自に開発した教材を用いて授業実践を行い、その教育的効果を検証したものである。北海道苫前町のA小学校の4年生14名を対象に開発した教材を用いた授業実践を行い、授業実践前後に実施したアンケート結果の分析から教育的効果を検証した。分析結果から本研究は、学習者に対して地域の開拓を進めた先人の働きや苦勞について実感を伴った理解を促すとともに、先人への感謝の気持ちや尊敬の念を抱く上で効果的であることが示唆された。

Abstract

Regarding fourth grade social studies, it is assumed that the example of the “Sankebetu Yugai incident” is taught, followed by class practice using the materials that were originally developed for the lesson. This study validates the educational effect of the materials developed for the class. An educational effects analysis of The class practice using materials that were developed for 14 elementary school children, were carried out before and after class practice. The purpose was to promote an understanding by the learner of the hardships and work of our predecessors who advanced the development of the region. The analysis of this study specifically helped us to develop a feeling of respect and gratitude to our ancestors.

1. はじめに

小学校学習指導要領社会編の第3学年及び第4学年の目標には、「(2)地域の地理的環境、人々の生活の変化や地域の発展に尽くした先人の働きについて理解できるようにし、地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにする。」¹⁾と示されている。また、第3学年及び第4学年の内容には、「(5)地域の人々の生活について、次のことを見学、調査したり年表にまとめたりして調べ、人々の生活の変化や人々の願い、地域の人々の生活の向上に尽くした先人の働きや苦心を考えるようにする。」²⁾と示されており、社会科の学習においては、児童が自らの住む地域の開拓に尽力した先人の働きや苦勞について理解することが重要である。

北海道苫前郡苫前町においては、約100年前に本州から集団移住した開拓団によって本格的な開拓が進められた。しかし、大正4年、厳しい自然に立ち向かい、地域の開拓に尽力していた開拓団を突然熊が襲うという痛ましい事件が起こった。この事件は世界最大の獣害事件と呼ばれており、本町の開拓史において欠かせない出来事として、現在も地域住民や児童に語り継がれている。

著者らは児童が社会科の学習を通して、郷土に対する誇りをもち、愛着を抱くためには、地域で実際に行われた開拓の具体的事例を素材として授業の中で活用することが有効であると考え。その際、地域で起こった甚大な被害事件の概要等を社会的・歴史的事実に基づいて活用することは、地域を切り開いた先人の苦勞や努力、願いなどに対して、児童が実感を伴った理解を深める上で有効な手立てであると考え。

2. 研究の背景

本研究を進めるに当たり、これまで行われた地域素材を有効活用による児童生徒の地域に対する理解や学習への関心に関する先行研究を概観する。内藤(2013)³⁾は、御勅使川扇状地の治水・利水に関する学習において地域素材を活用した授

業実践を行い、単元終了時には「地域に目を向け、地域を大切にしていこうという意識の高まりと地域の理解があった。」と述べている。さらに鈴木(2012)⁴⁾は、地域に実在した貴族が行った荘園支配や取引の状況を地域教材として用い、授業実践を試みた結果、「地域素材を提示することによって社会事象に対する生徒の関心を高め、イメージを高めることができることが明らかになった。」と報告している。また、篠原(1983)⁵⁾は、「直接観察や体験できたり子どもの意識と密接に結びついたりする具体的な事象を学習に取り入れ、それを通してその学習において理解させようとする基本的なねらいに迫るという手立てが必要である。その場合の具体的な事象は、地域や地域社会にみられる諸種の事象である。」と述べている。これらの先行研究では地域素材の活用が児童生徒の地域に対する理解を深め、社会事象に対する関心を高める上で有益であることを示している。

次に地域素材の活用による児童生徒の地域に対する誇りや郷土愛の育成に関する先行研究について概観する。渡邊(2006)⁶⁾は、確かなふるさと観の育成を目指して、地域の糸魚川を素材に教材化を図った授業実践を行った結果、「子どもたちがふるさと糸魚川のよさを再評価し、確かなふるさとへの自信をもたせることができたのではないかと考える。」と述べている。また、足利市立教育研究所(2008)⁷⁾は、郷土を愛する心の育成に関する研究として地域の先人との出会いや調査活動を行い、「児童が先人を尊敬し、郷土を誇りに思う気持ちが高まった」という成果があったことを示している。さらに次山(1988)⁸⁾は、「地域教材を扱うことの意義の一つに、学習する子どもたちの中に「自分たちの地域のよりよき発展を願う心を育てる」ことがある。」と述べている。これらの先行研究は、授業の中で地域素材を扱うことで、児童生徒が自らの住む地域に目を向けるきっかけを生み、地域を愛する気持ちや発展を願う心を養う上で有効な手立てであるということを示唆している。

地域素材の活用に関する先行研究を概観する中

で地域素材を有効活用することにより、実感を伴った理解を促したり、児童生徒の郷土愛を育成したりする上での教育効果は確認できた。しかし、筆者の調査では地域で実際に起こった甚大な被害事件を地域素材として開発した授業実践、さらに地域素材の活用による実践前後の児童の心情の変容を捉えた研究実践は確認できなかった。

そこで本研究では地域と児童の実態及び素材の文化的、歴史的教育価値を考慮して、実際に起こった熊害事件を地域素材として教材化し、授業実践を行う。さらに授業実践前後の学習者の心情の変容をアンケート調査によって見取り、地域素材が学習者に与える教育的効果についての検証を行うことを目的とした。

3. 北海道苫前町の地域素材の教材化

本研究では北海道苫前町の地域素材として「三毛別熊害（ゆうがい）事件」（表1）を扱う。町内には、郷土資料館内の事件復元ジオラマ（図1）や三毛別熊害事件復元現地、犠牲者の慰霊碑、水田発祥の地記念碑等があり、本町児童は熊事件が発生したことやこの地で古くから稲作が営まれてきたことについて理解している。しかし、「いつの時代にどのような事件が起こったのか。」という三毛別事件の概要や、「被害にあった人々はなぜ熊がいるところに住んでいたのか。」「この地が開拓された際、人々はどうのような生活をしていたのか。」という事件の背景にある開拓期の様子については知らない児童も多い。

本単元では、三毛別熊害事件に関する概要を教材として扱うことで、明治時代、大正時代に地域の土地開拓を任せられ、自然の厳しさに立ち向かいながら、苫前地区の開拓に携わってきた人々の苦労や努力について考え、理解するきっかけとした。そしてこの地を開拓した先人達を誇りに思い、郷土を愛する気持ちを育てるとともに、現在の自分の生活基盤を作った先人への感謝の気持ちと、地域の発展を願い、進んで行動する自覚を養いたいと考える。

表1 三毛別熊害事件の概要：苫前町史⁹⁾より

苫前町は明治20年代後半に開拓が始まり、未開の原野への入植は続いた。人々は掘って建て小屋に住み、粗末な衣服を身につけ空腹に耐えながら原始林に挑み、マサカリで伐木しながら、開墾を進めて行った。

大正初期、町内三毛別の通称六線沢（現・三溪）で貧しい生活に耐えながら、原野を切り開いて痩せた土地に耕作をしていた15戸の家族にその不運は起きた。大正4年12月9・10日の両日、380キロの巨大な熊が現れた。冬眠を逸した「穴持たず」と呼ばれるこの熊は、空腹にまかせ次々と人家を襲い臨月の女性と子どもを喰い殺した。その夜、この部落で犠牲者を弔うため人々が集まり通夜が執り行なわれていた民家に、再びこの熊が現れ、通夜は一転して悲鳴と怒号の渦と化した。この事件の犠牲者は10人の婦女子が殺傷（7人が殺され、3人が重傷）される、獣害史上最大の惨劇となった。



図1 事件復元ジオラマ：苫前町HP¹⁰⁾より

4. 授業展開

地域素材を有効活用した授業計画を作成し、授業実践を行うこととした。実践した授業の学習単元名及び本時の目標を表2、本時の学習指導案を表3、評価規準を表4にそれぞれ示す。学習単元名は教科書¹¹⁾及び副読本¹²⁾と同様とした。

表2 学習単元及び本時の目標

学習単元名	昔から今へと続くまちづくり 町の人たちのくらしのうつり変わり
本時の目標	昔前の開拓に尽くした先人は、生活を豊かにするために移り住み、厳しい自然や生活の中で苦勞しながら開拓を進めたことについて理解する。
評価の観点	社会的事象についての知識・理解

表3 本時の学習指導案

段階	学習内容及び子どもの姿	○支援◎評価 ☆留意事項
見 つ け る 15	①前時までの学習を振り返る。 ②数枚の写真から知っていることについて自由に発言する。 【写真】 ・三毛別事件被害者の慰霊碑 ・事件復元現地 ・事件再現ジオラマ ③三毛別事件の概要についての補足説明を聞いて理解する。 ④本時の学習課題を把握する。 【課題】先人はどのような思いで開拓を進めたのか？	○事件に関連する写真を提示する。 ☆PPT、プロジェクター ○事件発生は約100年前であったことを確認する。 ☆開拓のイメージがわからない児童へは、資料画像を提示する。
調 べ る ・ 考 え る 20	⑤先人の思いを探るために、事件に遭った人々の気持ちや自然の中で生活する苦勞について調べ、ワークシートにまとめる。 【写真】 苦前町水田発祥の地記念碑・九重開拓百年記念碑 【資料】 移住した団体の手記・三毛別熊害事件の概要 ⑥小集団、全体で交流する。 ⑦本時の学習をまとめる。 【まとめ】先人はきびしい自然や生活にたえながら、豊かな生活を願って開拓に必死に取り組んでいた！	☆小学校中学年向けの簡単な概要を説明する。 ○厳しい自然や生活の中で、生活を豊かにするために開拓を続けた人々の努力に目を向けさせる。
ま と め る	⑧本時の学習でわかったことをワークシートにまとめる。 ⑨次時の学習内容を確認する。	◎別記ルーブリックで判断(知識・理解、ワークシート)

表4 本時の評価規準

評価	行動目標化した判断の規準
A	開拓によって自らの生活を豊かにしようとする強い願いがあったこと、自然環境や生活環境の厳しさに耐えながら一生懸命働いていたことの2点について、それぞれ具体的な事例を交えながら記述している。
B	開拓によって自らの生活を豊かにしようとする強い願いがあったこと、自然環境や生活環境の厳しさに耐えながら一生懸命働いていたことの2点について、記述している。
Cの児童への手立て： 当時の生活を想起させ、日常生活を送る上で不便だった点や苦勞した点について考えるように促す。	

5. 検証方法

本研究は、201X年10月、北海道苦前町のA小学校4年生(15名)を対象として、前述の学習指導案に沿った授業実践及びアンケート調査による検証を行うこととした。授業実践前後に表5に示すアンケート項目を用いて児童の意識調査を行うことによって、社会科の地域学習に対する興味・関心や地域の開拓に関する知識、開拓民に対する感謝の気持ちや尊敬の念等について、児童の意識の変容を捉えることとした。

表5 アンケート項目

項目	内 容
Q. 1	社会で、地域(苦前町や北海道)のことを学習するのは好きだ。
Q. 2	苦前町は、いつごろ開拓されたのかを知っている。
Q. 3	苦前町は、だれによって開拓されたのかを知っている。
Q. 4	苦前町が開拓された当時の生活の様子について知っている。
Q. 5	苦前町を開拓した人はすごいと思う。また、あなたがそう思う理由を書いてください。
Q. 6	わたし(ぼく)は、苦前町が好きだ。また、あなたがそう思う理由を書いてください。

Q. 1 から Q. 6 の質問項目については、とてもあてはまる（4点）、ややあてはまる（3点）、あまりあてはまらない（2点）、全然あてはまらない（1点）の4件法で回答を求めた。また、Q. 5 及び Q. 6 に関しては、児童に項目を選択した理由を自由記述させ、回収後に各々の記述内容を分析し、児童の変容を読み取ることとした。

6. 教育実践

授業実践は、201X年10月17日にA小学校4学年14名（欠席者1名）を対象に、前述の学習指導案に沿って行った。実際の授業では、苫前町で起こった三毛別熊害事件の概要や事件現場の写真を導入資料として提示した。その後、教師が「なぜ熊が出るような危険な場所で開拓を進めていたのか」という発問をすることで、「開拓を進めた人たちはどんな思いで取り組んだのか」という問いを児童から引き出し、本時の学習課題に設定した。学習課題の設定後、児童は筆者らによる自作資料を用いて調べ学習を行い、調べた内容をワークシートにまとめた。なお、自作資料は「北海太郎新聞」と題し、苫前町へ移り住んだ人々の移住元や移住した理由、開拓地での苦労や努力の様子、開拓期における人々の心情等が読み取れるよう工夫している。また、ワークシートは4つの調査項目を分類して記述できる形式で作成している。なお、児童が調べ学習の中で調べた4つの項目を表6に示す。

児童は調べ学習の際、教師の自作資料を用いて前述した4項目についての情報を調べ、ワークシートにまとめていった。ワークシートの作成段階で可能な限り情報量を削減し調べやすいように

表6 調べ学習の調査項目

項目	内容
In. 1	いつ、どこから移住して来たのか？
In. 2	苫前へ移住して来た理由は？
In. 3	開拓の時、苦労したことは？
In. 4	開拓の時、うれしかったことは？

配慮したが、4年生にとっては情報量が多く、資料を読み取ることができない児童の姿が見られた。その際、配付資料の表題に注目すると必要な情報を見付けやすいことを伝えたり、個人で全ての項目を解決できない場合は、個人解決後に行うペア交流で解決できればよいということを伝えたりして、下位児も含めて全児童が安心して取り組むことができるように配慮をした。

個人解決後にはワークシートを持ち寄ってペア交流を行い、調べたことを交流した。その後、一人1枚の発表シートを配付し、項目ごとに振り分けて記述させ、学級全体で発表を行った。4つの項目において2～3人が発表を行い全体で理解を深めていった。

7. 結果と考察

授業実践前後に実施したアンケート調査において、欠席等により回答項目に欠損値があるデータを除いた有効回答は14名（有効回答率93%）であった。

アンケートによる検証では、前述の表1で示したアンケート項目により、授業実践前後における児童の意識がどのように変容したのかを捉えることとした。各質問項目において実践前後の平均値をもとにt検定を行った結果を表7に示す。

表7のアンケートにおいて、Q. 5の項目で実践前後における平均値の有意な増加が見られた。このことから、本授業実践によって地域の開拓に

表7 実践前後での児童の変容

項目	事前		事後		t-値
	平均値	SD	平均値	SD	
Q. 1	3.57	0.82	3.64	0.81	0.54
Q. 2	3.64	0.48	3.43	0.90	-0.79
Q. 3	2.36	1.17	3.07	1.03	1.67
Q. 4	3.07	1.16	3.64	0.72	1.60
Q. 5	3.50	0.73	3.93	0.26	2.39*
Q. 6	3.86	0.52	3.86	0.52	0.00

N=14, t検定（両側・対応あり）、* p<.05

携わった先人に対する尊敬の念を抱く上で効果があることが推察される。

さらに平均値の有意な増加が確認できたことを受け、Q. 5における自由記述の内容からその要因を検討する。検証方法は、児童がQ. 5のアンケート項目を選択した理由を授業実践前後で比較検証する。アンケートのQ. 5において、実践前後に児童が記述した内容を表8に示す。

実践前と実践後の記述内容を比較すると、児童の意識の変容を捉えることができる。児童②、児童⑥、児童の記述から、実践前には「なんとなくすごい」といった感覚的な理由であったものが、実践後には「苦労をのりこえてやったのがすごい」「きびしい生活にたえながら開拓したのはすごい」といったより具体的な理由に変化している。同様に児童⑭は「すごいからすごい」との記述から、「開拓が大変な時にできることがすごい」との記述へと変容している。厳しい生活に耐えながらも開拓に携わった先人たちの苦労の実態に意識が向いた様子が読み取れる。

類似の傾向として、児童③は、「いろいろなことをやってすごいなと思う」という記述から、「いろいろな苦労をのりこえたから」という記述へと変化、児童④は、「開拓したからすごい」という記述から、「人が住める所を作ったからすごい」とう記述へと変化している。また、児童⑨は、「町を作ることはたいへんなのに… (省略)」という記述から、「お金がすごくかかったのに作った」という記述へと変化している。いずれも、漠然とした理由から、開拓者の居住地開発に関わる労力や投資面での苦悩などをイメージしたより具体的な理由に変容している。

児童⑪は、「すごい」という感嘆表現のみであったが、事後には「くろうがあったのにいいらしにしたい」という開拓者の願いに触れた理由を記述している。厳しい自然の中で苦労を重ねながらも、自らの生活の向上を願って開拓を進めていた先人の心情に迫ることができている。

アンケートのQ. 5における児童の記述内容の変容を分析した結果、実践前は「開拓した人はす

表8 アンケートのQ. 5における児童の記述内容

児童	事 前	事 後
児童①	開拓した人はなぜここを開拓したのかわからないけど、時間をかけて開拓したのがすごい	開拓はすごくつかれることだからすごいと思った
児童②	なんとなくすごい	苦労をのりこえてやったことがすごい
児童③	開拓した人はいろいろなことをやってすごいなと思う	50年前の人たちはいろいろな苦労をのりこえたから
児童④	森だったところを開拓したからすごいと思います	森だった所を人が住める所を作ったからです
児童⑤	住めるようにしたのか不思議に思ったし、すごいと思います	いろいろな人が開拓してがんばったから
児童⑥	なんとなくすごい	きびしい生活にたえながら開拓したのはすごいと思う
児童⑦	苦前町ならかいたくするのはむずかしいとおもったから	すごいから
児童⑧	そのおかげで今すめているからすごい	そのためで今生きているから
児童⑨	町をつくるのはたいへんなのに、町にすめるようにしたからすごいと思う	お金もすごくかかったのに作ったから
児童⑩	みんなをすめるようにしたからすごい	苦前を作ったから
児童⑪	すごい	くろうがあったのにいいらしにしたい
児童⑫	かいたくした人はすごいと思います	きょういんせんせいとべんきょうをしてすきになりました
児童⑬	木を切ったり木をとったりして苦前村、苦前町を作ったのがすごい	家やたてものをつくった人だから
児童⑭	すごいからすごい	開拓を大変なときにできることがすごかった

ごい」と思った理由のほとんどが抽象的、感覚的な文章表現であるのに対して、実践後には、具体的かつ共感的な文章表現に変化していることが読み取れる。

以上のことから、地域の開拓の具体的事例を素材として授業の中で活用することで、自然の厳しさに立ち向かいながら、開拓に携わってきた人々の苦労や努力について実感を伴った理解を促すとともに、先人に対する感謝の気持ちを高めたり、尊敬の念を抱いたりする上で効果的であることが推察された。

8. おわりに

本研究では、社会科の学習における地域素材の有効活用について、授業実践を通して、その効果を検証した。以下に本研究の成果をまとめる。

- 1) 社会科の地域学習において地域素材を有効活用することで、地域の歴史や開拓に携わった人々の苦労や努力について児童に実感を伴った理解を促すことができた。
- 2) 地域素材を有効活用した授業展開により、学習者の先人に対する感謝の気持ちや尊敬の念が有意に増加することが示唆された。

以上から、地域素材の有効活用が社会科の地域学習において効果的であることを示すことができた。しかしながら本研究には、検証において課題が存在するため、以下に述べるとともに、今後の展望を示す。

授業実践においては、自作資料から全ての内容を見つけ出せず適切に記述できなかった児童もあり、やや物足りない全体交流となってしまった。自作資料の作成は歴史的事実に沿いつつも、中学年という発達段階に応じた内容の吟味が必要であった。また、本研究においては、1単元による実践ではなく、1単位時間の授業実践において児童の変容を見取ることとしたため、社会的な知識・理解に関する部分でしか、児童の変容を見取ることができない。地域素材の有効活用による効果をより明確にするためには、単元レベルでの授

業実践を行い、関心・意欲・態度の変容や社会的な思考・判断の変容についても実証する必要がある。今後、更なる検証を重ねたい。

付 記

本研究の要旨は、日本教科教育学会 第39回全国大会（2013年11月）にて発表している。

参考文献

- 1) 文部科学省, 2008, 小学校学習指導要領解説社会編, 東洋館出版, p.19
- 2) 前掲1), p.19
- 3) 内藤大輔, 2013, 地域素材を活用した「生きる力」を育むための授業実践, 学芸地理67, pp.113-12, 東京学芸大学地理学会
- 4) 鈴木和紀, 2012, 地域素材を生かし生徒の関心の高め探究する力をのばす授業づくり, 山形大学大学院教育実践研究科年報No.3, pp.116-123
- 5) 篠原昭雄, 1983, 地域教材を活用した地理的分野の授業, p.8, 明治図書
- 6) 渡邊興勝, 2006, 確かなふるさと観の育成を目指した地域素材の教材化, 教育実践研究Vol.16, pp.191-196, 上越教育大学学校教育総合研究センター
- 7) 足利市教育研究所, 2009, 足利の教育風土を基盤とする郷土を愛する心の育成研究, 教育論文集4
- 8) 次山信男, 1988, 地域素材を生かす社会科単元の開発, 東洋館出版社
- 9) 苫前町編纂委員会, 1982, 苫前町史, 苫前町
- 10) 苫前町教育委員会社会教育課, 事件の概要, 苫前町HP, www.town.tomamae.lg.jp/section/...att/lg6iib0000000lsx.pdf, (2014年3月最終閲覧)
- 11) 教育出版, 2010, 小学社会3・4下, 「昔から今へと続くまちづくり」, 教育出版株式会社
- 12) 苫前町教育委員会, 2011, 「とままえ」(小学校社会科副読本), 「町の人たちのくらしのうつり変わり」, 苫前町

(因 雅仁 苫前町立苫前小学校)
 (藤川 聡 旭川校准教授)
 (水上 丈実 旭川校教授)

